

1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ	部落問題を自らの課題ととらえ、対話を通して解決して いくための実践行動力を育む ～保護者・地域と共にすすめる人権教育の取組～
----------	--

○調査研究のテーマを設定した目的

本校の教職員は、子どもの行動の背景にある原因はどこにあるかを見つめることを大切にしているが、さらにその取組を進め教育的に不利な環境のもとにある子どもの生活背景や様々な事情による生きづらさをつかんでいく必要があると考えた。

本校では人権教育目標に、「教職員と保護者・地域の人々が差別を許さないという思いでつながり、子どもたちが差別を許さないという思いでつながる教育に連携・協力して取り組むこと」を掲げている。そして、子どもたちが互いのよさやちがいを認め合い、思いを出し合い、自分たちの課題の解決に向けて協力して行動できるようになることに力点を置いて取組を進めている。

しかし、全国学力・学習状況調査の児童質問紙（以下、「質問紙」）で「学校生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」という問いに肯定的な回答をする子どもの割合が全国平均や県平均と比較して少ないという結果からも、なかまと対話をして、自分たちの身のまわりにある課題を解決していこうとする意欲や態度の低さがうかがえる。また、コロナ禍によって、子どもたちが対話を行うことが制限され、その機会が減少したことも影響していると考えられる。桑名市小中学生の人権に関する意識調査の「差別の問題を解決するために、今のあなたにできることはどのようなことですか」という問いに「家族や友だち、先生に相談するなどして一緒に考える」や「学級での話し合いや、人権に関する話し合い活動に参加する」と答えている子どもの割合が桑名市全体の平均と比べて低くなっている。この結果からは、人権問題の解決に向けて行動を起こす力に弱さがあることがわかる。また、本校の子どもたちは、地域の人やまわりのおとなに積極的に話しかけていくような、人懐っこいところがある反面、質問紙の「人が困っているときは、進んで助けますか」という問いに対して肯定的に答えている子どもの割合も全国平均や県平均と比較して低い結果が出ており、他人と深く関わろうという姿勢に弱さが見られる。このような子どもたちが、自分の思いを語り、共に考えることのできるなかまと自己実現に向かうために、学校・学級を「自分が出せる、そして受けとめてもらえる安心できる場所」にしていく必要がある。授業や環境、人間関係において人権感覚にあふれる人権が大切にされる学校・学級は、教育的に不利な環境のもとにある子どもの居場所づくりにもつながっていくと考

えた。

このような課題や解決に向けた考え方に基づいて、対話を通して人権問題を解決していく経験を積んでいくことを研究内容とした。本校ではこれまで算数科において、対話を通してともに学び合い、課題解決していく子どもについて研究を重ねてきた。これらの研究成果も活かしながら、人権教育としても「教材との対話」「身近な友だちやまわりの人との対話」「自分自身との対話」という3つの視点から具体的に取組を進めていく。出会った教材と子どもが深く「対話」すること、また身近な友だちやまわりの人と自分の考えや思いを「対話」すること、そして自分を振り返り自分自身と「対話」することを通して、自分や他者の人権を守ろうとする意識や意欲、態度を育み、人権問題を解決するために主体的に行動する力を身につけていく。

部落問題をはじめ子どもを取り巻く人権問題について、このような3つの「対話」を通して解決に向かう取組を研究課題として進めていくこととした。

○調査研究の概要

部落問題をはじめ個別的な人権問題を自分の課題としてとらえ、課題解決に向けた実践行動ができる力を育成するために、教育的に不利な環境のもとにある子どもを中心にすえたなかまづくりを進め、安心して発言できる学習環境や、安心して自分のことを語ることのできる人間関係を構築し、人権問題をなかまとの対話によって解決していく学習活動について研究した。

2. 基本情報

研究指定校の概要

○学校名

桑名市立修徳小学校

○これまでの研究指定等の状況

○学級数

14 学級（うち特別支援学級：3 学級）

○児童生徒数（R.5.5.1）

全児童数：309 名

○URL

<http://www.kuwana-c.ed.jp/shutoku-e/>

○指定理由

これまで本市で行ってきた部落問題学習が、差別に出会ったときに、それが「おかしい」と気づくことのできる子どもを育成することにつながっていたのかという検証が求められている。当該校を含め、市内すべての学校で部落問題学習が進められているが、その学習の多くが部落史や、部落差別がどのようにつくられてきたのかなどの部落問題に関する知識を身につけることが中心の学習になっていた可能性がある。「人権教育の指導方法等の在り方について（第三次とりまとめ）」においても人権教育を通じて知識的側面、価値的・態度的側面、技能的側面の資質・能力をバランスよく培うことが大切であると示されている。本市の人権教育の目標は、自他の人権を大切にし、差別の問題を解決する実践行動を起こすことのできる子どもを育てることである。行動を起こしていくためには、身のまわりにある偏見や差別に気づくことのできる感覚や、まわりの人がつらい思いをしていることに共感できる感受性が必要となる。また、問題を自分事としてとらえ主体的にその解決に向かう態度も必要になる。そして、問題解決をしていくためにはその道筋や方法について知らなくてはならない。それを知ることによって差別をなくしていく展望を持つことができる。

また、部落問題をはじめとする人権問題の解消のためには、学校・家庭・地域が連携して問題の解決に向けて共に考え、行動することが大切である。しかし、教職員が保護者や地域の方々と部落問題をはじめとした人権問題について十分に話せているとは言えない現状がある。

これらの状況を鑑み、子どもたちが差別をなくすための実践行動を起こしていくことをめざす部落問題学習を、保護者、地域と連携しながらモデル校として構築していく。そして、本研究の成果と課題を整理し、市内の小中学校に広げていきたいと考える。

○取り組んだ人権課題について

該当するものに○印、最も主要な人権課題1つに◎印を付与

①子供	○
②女性	○
③高齢者	○
④障害者	○
⑤ <u>同和問題</u>	◎
⑥ <u>アイヌの人々</u>	○
⑦ <u>外国人</u>	○
⑧- 1 HIV 感染者等	○
⑧- 2 <u>ハンセン病患者等</u>	○
⑨刑を終えて出所した人	○
⑩犯罪被害者等	○
⑪インターネットによる人権侵害	○
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	○
⑬性的指向、性自認	○
⑭その他 ()	

3. 調査研究の内容等

○調査研究の内容

ア 人権学習教材等を活用した人権学習

部落問題を解決し、人権が尊重される社会をつくるには、子どもたちが人権問題についての理解を深め、問題を自分事としてとらえ、その解決のための実践行動ができる力を身につけられるようにしなければならない。そのために、人権学習の中で、子どもどうしの対話を意図的に取り入れながら、なかまと共に課題解決に向かっていけるよう取り組んだ。身のまわりにある人権問題について、子どもたちが対話を行いながら、その解決方法を見出し、具体的な行動につながる意欲を高められるよう、桑名市教育委員会が作成した人権教育資料や、三重県教育委員会が作成した『みんなのひろば』等の人権学習指導資料を活用し、人権教育カリキュラムに位置づけた人権学習を充実させていくよう取り組んだ。

イ 家庭・地域との協働、小中の連携

家庭・地域との協働については、人権学習の授業参観を実施し、その際に保護者と懇談会を行うなど保護者と教職員で意見交流をする機会を設けた。また、日常の人権学習や子どもの様子をたより等を通じて発信した。さらに、市の「人権教育地域づくり事業」を活用し、学校・保護者・地域が共に人権問題について学ぶ機会を持った。

小中の連携については、本校を含む小学校3校、中学校1校の中学校区で設置している人権教育の課題別部会で、各校の人権教育カリキュラムや取組を交流する機会を持った。また、部落問題に関する授業公開や小中学校の人権フォーラム等により、各学校の人権学習で学んでいることや、身のまわりの差別をなくしていく取組について話し合う機会をさらに充実させ、小中の連携を深めた。

ウ 自分の思いが安心して出せるなかまづくり

本校では、教育的に不利な環境のもとにある子どもを学級を中心にすえたなかまづくりを行っている。2023（令和5）年度には、なかまづくりのレポートを年間3回交流する機会を持った。しかし、教育的に不利な環境のもとにある子どもの背景をとらえてその子が抱えさせられている人権問題は何かを明らかにすること、その子を中心として子どもをつないでいく具体的なイメージを教職員間で共通理解することに課題が見られた。学級のなかまづくりにおいては、互いの思いを共有・共感することができる関係をつくっていくことを大切にしてきた。教育的に不利な環境のもとにある子どもが、自分のこと、不安や生きづらさを語り始めたときに、どれだけまわりの子どもたちが、その子どもに自分のくらしや経験を重ね合わせ共感できるかが大切になってくる。まわりの子どもたちが共感することによって、教育的に不利な環境のもとにある子どもが自尊心

情を高めていくことができる。このように、対話を通して、誰もが安心して自分の思いを出せるなかまづくりを進めた。

エ 人権教育カリキュラムのブラッシュアップ

本校では、これまで学校の人権教育目標の具現化に向けて、学年別に子どものめざす姿を明らかにして、年間の人権教育カリキュラムを設定してきた。個別的な人権問題に関わる学習についても、各学年の実情に応じて配置し、取組を行っている。しかしながら、各学年で取り組む人権学習は明確に示されているものの、小学校6年間の系統性という点では課題が見られる。そのため、小学校卒業時のめざす子どもの姿を明確にし、その姿に向けて各学年の取組で課題に残ったことを検証し、毎年、人権教育カリキュラムの修正を行うようにした。また、それぞれの学習が人権問題を解決するための子どもたちの行動にどのようにつながっていくのかを常に検証しながら、人権教育カリキュラムのブラッシュアップを図った。

オ 教職員の資質向上

本校においては、教職経験の少ない教職員が多く、人権教育の実践について不安を感じている教職員も少なくない。次世代を担う教職員への人権教育実践の継承も大きな課題となっている。そこで、校内研修の充実や、他校の実践に学ぶ研究会や各種研修会への積極的な参加を通じて、教職員の指導力向上を図った。特に、教職経験の少ない教職員に対しては、人権教育の実践において大切にすべき取組の視点について理解できるような研修を実施し、実践への不安を払拭することをめざした。また、教職員それぞれがどのように部落問題に出会ってきたかを交流する機会を持ち、自らを見つめ対話をしながら、自らの人権意識を問い直した。

○実施方法

ア 人権学習教材等を活用した人権学習

- ・設定した力を育成するための効果的な学習活動について研究し、系統的な計画として位置づけるため、人権教育カリキュラムの改善を行った。
- ・教材を活用した授業の充実を図るために、講師を招聘して校内研修を実施したり、県教育委員会が開催する研修会に参加したりした。

イ 家庭・地域との連携、小中の連携

- ・人権学習の授業参観後に懇談会を実施し、保護者と教職員が人権問題や人権学習について共に考える機会を持った。
- ・家庭訪問等を通して、保護者の思いや願いをつかむことに努めた。また、たよりや保護者会等を通して日頃の部落問題学習の取組や児童の様子を発信した。
- ・PTAと協働し、保護者と教職員が部落問題について「対話」する場を設定し、実施

した。

- ・市の人権教育地域づくり事業を活用し、人権教育推進協議会において学習会や講演会を企画し、地域の方や保護者と共に人権問題について考える機会を持った。
- ・中学校区の人権教育の課題別部会で、校区の子どもたちの課題、各校が作成している人権教育カリキュラムやそれに基づく取組の共有を行った。
- ・中学校区で「部落問題の解決に向けた中学校ブロックのつどい」を開催し、各校が授業実践の公開を行った。

ウ 自分の思いが安心して出せるなかまづくり

- ・教育的に不利な環境のもとにある子どもを中心にすえ、なかまづくりの実践レポートを作成した。レポートをもとにした交流会において具体的な様子や変容を交流することによって、教職員間で子どもの見方の共通理解を図った。
- ・対話を通して課題解決に迫れるよう、対話を行う際に大切にすることを確認し、すべての授業において、意図的に対話の機会を取り入れた。
- ・自分の身近な人権課題について学級で対話し考える機会を持った。

エ 人権教育カリキュラムのブラッシュアップ

- ・カリキュラムマネジメントに留意し、子どもの発達段階をふまえ、各教科と個別的な人権問題についての学習内容を関連づけて教科横断的な学習計画を組み、人権教育を総合的に推進するための人権教育カリキュラムの作成をめざし、検討を始めた。
- ・各学年でめざす子どもの姿を明らかにし、系統性のある学習となるようにすべての教職員で課題の共有を行った。
- ・取組が子どもにつけたい力の育成につながっているかの検証を行い、定期的に取り組の見直し・改善を行った。

オ 教職員の資質向上

- ・教育的に不利な環境のもとにある子どもを中心にすえた教育実践について学ぶ全体研修会を実施した。
- ・三重県人権・同和教育研究大会や全国人権・同和教育研究大会に参加し、他校の人権・同和教育から学んだ。また、その内容を校内で還流した。
- ・教職員が自らの実践を「なかまづくりレポート」にまとめ、そのレポートをもとに校内で実践交流を行うことで、実践力の向上を図った。
- ・校外で実施される公開授業や研修会、各種研究会に積極的に参加するとともに、校内で還流報告を行い、本校の研究につなげた。
- ・差別解消三法や県の「差別を解消し、人権が尊重される三重をつくる条例」の趣旨を理解するための研修会を実施し、本研究に取り組む目的について全教職員で認識の共

有を図った。

4. 検証・評価・改善・普及

<桑名市立修徳小学校>

・なかまづくりの取組について、実践交流を行った。教育的に不利な環境のもとにある子を中心にすえ、家庭訪問を繰り返すことで、今まで見えなかった背景が見えてきて、それを共有しながらなかまづくりにつなげることができた。

・人権学習の研究授業を行い、事後協議において、教育的に不利な環境のもとにある子どもを中心に学習活動における子どもの言動や感想等をもとに、「子どもにどのような気づきや変容があったか」「つけたい力の育成につながったか」について検証を行った。

・県教育委員会が作成した「人権意識についてのアンケート」を実施した。「人権問題を解決するために何かできることをしたい」という問いに対して肯定的回答の割合が増加したものの、「人権問題を解決するために自分に何ができかわかっている」という問いへの回答には変化が見られなかったことから、意欲を具体的な実践行動につなげることには課題が残った。

・人権学習に関する授業参観に、「親も子どもとともに人権について考える機会を持つことができよかった」「人権学習の大切さを感じた」等の感想があり、保護者の人権意識の向上が見られた。

・中学校区の学校に、研究実践に基づく人権学習を公開した。また、研究で得られた成果等について市内の学校に対し還流を行った。

5. 人権教育に係る年間指導計画

月	児童活動計画	職員研修計画	備考
4	学級目標を決める	人権教育カリキュラムの検討 人権教育推進計画の作成	
5	人権意識調査アンケート ピンクシャツ運動	なかまづく りレポート作成 講演「子ども・保護者とどうつながるか」	
6		桑名同研レポート検討会 講演「今なぜ部落問題学習なのか」	
7	1学期の活動について振り返る	人権意識調査アンケートの分析 自分を語る会 講演「教育的に不利な環境のもとにある子のとらえ」	
8	人権ポスター・作文・標語に取り組む	桑名市人権・同和教育研究大会 桑名市同和教育研究大会レポート提案	
9	運動会に向けて	部落問題の解決に向けた中学校ブロックのつどいの授業提案に向けて	
10		三重県人権・同和教育研究大会参加 研究発表会（1年目）	
11	人権集会に向けて ピンクシャツ運動 人権意識調査アンケート	部落問題の解決に向けた中学校ブロックのつどい 校内人権集会に向けて 人権についての授業参観・懇談会	
12	人権フォーラムくわな参加（6年生） 2学期の活動を振り返る 人権フォーラムくわな還流報告 人権に関する意識調査（6年生）	校内人権週間に向けて	
1	人権集会	講演「差別をなくす活動をしている人から学ぶ」 なかまづくりの実践交流 全体研修（人権教育カリキュラムのブラッシュアップ）	
2		全体研修（人権教育カリキュラムのブラッシュアップ）	

		本年度の成果と課題についての協議	
3	1年間の活動を振り返る	来年度の方向性検討	

6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）

